



1 月 10 日草土稲荷神社へ初詣



あけましておめでとうございます。
今年も皆様にとって良い
年であります様心よりお
祈り申し上げます。



第 14 号

H24 年 1 月 10 日

発行

社会福祉法人東光会

サービスハウス 事務室

TEL084-941-5255



12 月 13 日 幕山小学校児童来所 歌を聞かせてもらい一緒に健康体操をしました。



折り紙や綾取り、福笑いなどして楽しいひと時を過ごしました。



孫?と一緒に
仲良く勉強です



12 月 17 日 今年も
「らうんどはんず」の皆
様による大正琴の演奏
会があり、演奏に合わ
せて懐メロなどを一緒
に口ずさみました。
くじ引きで、かわいい
ぬいぐるみが当たりま
した。

かわいいやろ...



シベリアへ送られて



郡 誠司



* 原木流し(出向作業) *

作業隊は少人数の編成に代わっています。長らく一緒だった上山兵とも離れてしまい総勢 20 人足らずの木村兵組となりました。翌日からラーゲリを離れ出向作業となりました。「ねぐら」が変わりますから旅支度をいたします。毛布一枚に身の回りの物を一切梱包して準備が終わりました。炊事担当となる川瀬兵は糧食用具と食材を受け取って来ていました。

衛門まで行ってトラックを待っていますと一台のトラックには警戒兵すら乗っていないのです。季節労働者のようでした、トラックは現地へと走らせていましたがどうやらエニセー川に沿って上流へと向かっています。シベリヤ鉄道の鉄橋をくぐりなおも北上し仮泊所に到着したようです。

上下二段の機敷になっていました。ラーゲリの寝心地よりよさそうでした。炊事の川瀬兵は宿舎の裏手で鍋を据えて昼食の準備にかかっていた。火種を作るのに苦労したと思います。「昼食ができたぞ」と知らせて来ました。粟の粥が出来ていました。熱いものが口に入り心なしか分量も多く喜んでいました。

川瀬兵は時計を持たされていたのか、食事時間は間違いなく刻まれていました。監督のいる事務所が何処なのか「おはよう！」と言

って迎えに来る。「さあ、行こうか」と言っ

って川端へ降りて行く。監督はその日一回顔を

見せたら知らぬ間に居なくなっている。

作業は、極寒期に伐採された大木を雪解けの流れに任せ流れてきたが、方々の川端に上がったまま放置されているのを、一本一本と流れに沿わせて転がして行く。初めの程は多くあった大木も次第に上流へと移動して行った。「トンボ採り今日は何処まで行ったやら」である。この日はかなり上流へと上って行った。監督は現場を見ていても何も言わなかった。流した大木がどの様に捕えられているのかも分からなかった。一週間が過ぎて宿舎へ帰ってみると流木作業はこれで打ち切りと伝えられた。

原木流しを打ち切って帰る日曜日の朝監督がやってきて「今日は入浴のある日だから、身体を洗って帰れ」と言ってくれた。ロスキーも誰も来ていない入浴にしっかりと身体を洗い、夕景やつと迎えに来たトラックで帰ることができたのでした。

* 貯蔵の季節 *



暑かった夏も過ぎると秋の収穫の季節が待っていた。シベリヤの季節は悠長にはしていなかった。慌ただしく収穫を終えると貯蔵しなければならぬ。貯蔵庫は至る所にあつたようでした。

我々に与えられた作業は、キャベツの山でした。毎日のキャベツが所狭しと、積み重ねられていました。このキャベツの一個一個の表面の傷の有無を調べ悪い表皮を除いては、一輪車に載せ一台が一杯になると貯蔵庫へと運んで行ったのです。もうここでは放り投げることは禁物でした。

毎日がこのような作業でしたから、兵達も抜け目なく飯盒を持ってきて焚火を始める。湯を沸かしてはキャベツを飯盒一杯に茹で上げて、昼には食し、ラーゲリに帰るときにはもう一杯茹で上げて夕食の友にしておりました。寒冷地に出来た物の甘味といったら格別美味しいものでありました。

一週間も来ていると十分なビタミンの補給が出来たものと思っています。貯蔵作業が終わって再びこのような作業に出会うチャンスは残念にも巡っては来ませんでした。

給食のスープに使われる主な野菜の名を記しておきたい。

キャベツ・・・カポースタ
じゃが芋・・・カルトシカ

* ベトン工場 *

現地では生コンの事をベトンと言っていました。我々の組は権野兵見習士官です。作業場は遠くなので往復トラックに乗せられ歩くこともなく寒くて少々風を切っても楽な思いでありました。このプラントには、他の組も来ていた。工場の主な作業はベトン作りと、他の組が担当していたベトンによるブロック作りに分かれていたのです。権野兵の組は朝から帰るまで、砂、バラス、セメントと受け持ちの一輪車で交互に屋内にあるミキサーまで運び入れの一日です。

外部からダンブカーがひっきりなしにベトンを積み重ねては往復を繰り返していました。他の場内の施設個所の整備等に雑役兵も何人か働いていました。

寒気はさつさと来てしまう。防寒服装に身を固めカートンキという長靴に履き替えていました。ある日、もう寝るような時間になっ

から、不意に五六十名の転属者がラーゲリへ着いていました。組分けの後、我班にも中に十二三名が入ってきたのでした。僕の隣に来たのが山本兵という大工の棟梁をしていたという親父さんでした。山本兵の話によると、森林伐採の作業をさせられていたようで、ノルマは厳しく随分とえらい目に合わされたという。栄養失調による多くの死者がでていて、大きな穴が掘ってあつて死者をロープで引張り、穴へ落としていたんだとも言った。話はつきないで翌日からトラックに乗せられ、ベトン工場へと向かって行ったのでした。

工場についてみると、僕と山本兵は工場の営繕を担当することになりました。大工道具らしきものはありません。相も変わらず二人挽鋸と斧を持っているだけなのです。一度大きな作業にぶつかったことがありました。空室になっていた建物の天井を張る作業でした。

天井を張る高さは、およそ三〜四メートルはあったと思います。材料も満足に揃っていない中での足場作りでした。小丸太さえ無く困ってしまいましたが、山本兵はさすが棟梁だけあつて、手近の角材と板材を使って作ってしまったのでした。足場は終わったらいらなくなるので、場所に応じて急増で安全であればそれで良いのだと教えられてしまったのです。

このように言っ

た山本兵は腕木に薄い歩み板を渡して二人が乗ると上を向いて両手を伸ばして板を張っていくのだから、足元に重力がかかり「ふわふわ」と浮いているような感じだったが、山本兵のすることだから安心はしていたのです。時折作業の進み具合をみて監督は「とても良くできています」と言っ

ていた。権野兵の組では天井作業の結果、山本兵と僕とがルーブルを手にしたことが出来たのでした。ひとり宛三ルーブルでした。何を買って食べるとか、それには手は届きませんよ。

やはり手にしたいのは現地の人達に似合ったマホール力です。「刻みタバコ」なんです。タバコの茎を葉と混ぜて小刻みにしたものです。これが労働者にもっとも愛されていたのです。

タバコとは現地では紙巻きたばこの事を言っていて高級品であり口にしてるのを見ることはありませんでした。

* 昭和二十一年も終わる *



厳しい寒さの中を防寒服に身を固めトラックに乗せられてはベトン工場へ通っていた。十二月になっても二週間もすれば昭和二十一年も終わります。

今日という日が暮れば明日があるという無味乾燥の生活をつづけ、沈む太陽を何度数えたか、十二月三十一日今年最後の作業に出て行った。工場に居るロススキー達の顔色を見ても明日から年度が変わるのだという浮立った表情にはみえなかった。

日が沈むとラーゲリへ帰って来た。ラーゲリで大掃除が始められるわけでもない。帰ると飯盒をぶら下げて飯上げに行ってくる。濃い雑穀の粥が夕食なのです。食べてしまえば今日の行事は終わりました。藁布団に寝転がり、「明日は正月か」とつぶやいてみるだけでした。シベリヤへ来てから一年と三か月が経っていたのです。

「青春」

シベリアに青春虜られ 厳夜の北極星

* 昭和二十二年（一九四七）



暗闇の中に朝を迎えて

暗闇の中にレールをカンカンとたたく音に眼を覚ます。いつもに変わりなく時間は来ていました。外はまだまだ闇夜の世界です。でも朝寝坊はしてられません。ラーゲリの兵達は休養日ではあっても飯上げだけは行っておかないと炊事はいつまでも待ってはくれません。

一足先に飯上げから帰って来た兵が「今朝の給食は、すげえいぞう！」と満足そうに皆に言い聞かせています。まだ部屋にいた兵達はじつとはしていません。次々と飯盒片手に炊事へと出て行くのでした。

一番の窓口で木札を渡す。飯盒の蓋を出すと「おはぎ」に近いようなカーシャ（粥）を入れてくれ、もう一つの蓋には「いもきんとん」を入れてくれた。二番の窓口へ行って黒パンと、中味の濃いスープを飯盒に入れてもらい部屋に帰って来ました。一度ももらったものを眺めてからゆっくりと味わっています。お互いしゃべくりもしません。情緒の乏しい生活の中で平素口に入らない物などを食した満足感に、どの兵達もとても喜んでいようでした。昼食、夕食は通常通りでしたから今日の一日はこれで終わりたいと思います。

現地のロススキーたちもすべてが休養日でした。この日が終わると翌日から労働日になります。ラーゲリの兵達もロススキー達も二日として休まない。労働条件は平等のようでした。

* 第四建設 *



外は暗闇の世界、いつもの通り毛布一枚をすり抜け、朝食も終わって衛門の前に集まっています。

ました。休養日の一日が終わると二日から労働日です。点呼を受けて夜道を歩きます。ラーゲリの裏手を走るシベリヤ鉄道を渡り、エニセー川の方向へと歩きますが川面など見えていません。それ程広大な原野に何が出来るのか分かりませんが、事務所と倉庫が建っているだけでした。照明などありません。八時には現場に来ていましたが何も見えなくても労働時間に入っています。器材を取り出すにも明るくなるのを待っているのははなかつたのです。

このような暗い中でマダムのスットン狂な声が冷たい空気を響かせていました。それは現場に大きなトイレが建っていたようです。マダム達も多く来ていたようで暗い間に利用するのですが、そこへ日本兵も不用意に駆け込むのがいるらしく使用中のマダムがびっくりしてスットン狂な声を上げていたのです。

間の抜けた話ではありませんか。九時ごろになるとやっと周囲の様子が見えてきたようでした。我が兵達は編成替えにより佐藤兵組となっていました。この現場の受け持ち作業は広大な原野を囲む板塀作りでした。一辺が何キロになるかもわかりませんがとにかく穴を掘っては4メートルある太い丸太を立てていきます。初めの二本位が慎重に並列する線が乱れないように進めて行き、次第に柱の数は増えて行ったのです。

何といっても極寒の毎日ですから、大焚火をしては暖を取っていましたから火に当たっている時間も結構長かったようでした。燃やす材料はどこからでも集められたので気楽に大焚火にしていました。時折、監督が回ってきますが、彼とて微用の身でありますから、いつまでも暖を取り故郷の事を話してくれませんでした。それだけ寒い季節なのです。

柱を立てる穴とて、この極寒期、地表は凍結

しています。それを割り込んでからの穴掘りでしたからこの苦難は省略させていただきます。佐藤兵組も二組に分かれ柱を立てる組と、塀を張る組とで作業は進行していました。

柱と柱を上下二本の角材を打ちつけては板を張っていきます。板塀の天部が水平にならなければなりませんから、これは困りものでした。気温も氷点下30度、35度と下がると防寒帽子をかぶっていても寒さはたちまちにして神経を奪ってしまわれます。眉も凍って瞬きさえ不自由でした。極度に低温が続く日があつて、事務所の寒暖計が氷点下5度を指しているのを確認するとすべての作業は中止されるのでした。

兵たちも器材を返納し急いでラーゲリへ帰った事がありました。夕食までの時間は休養日でした。極度に低温となる日は一度は襲っては来ますが、度が続くことはなく、次第に気温も5度台へと戻ってきます。板塀は延々と伸びて行き、ある地点まで来ると角となり、なおも延ばされて行きましたが途中で打ち切りとなったのでした。

佐藤兵組は別の部署へと移動しましたが、僕と相棒の高橋兵とは柱の木工作业が残っている。板塀に戻ることにしました。柱の頭部を二メートルに切り揃える作業です。早速二台の梯子を作らねばなりません。着ぶくれした二人が梯子の上で作業するのは楽な事ではありませんでした。途中で僕の手には切れないヤスリを取り出し目立てをしてから切り始めると、切れ味は上々、100近くも切ったのかな。最悪の極寒期この作業で過ごしたような気がしてならなかった思いがしています。

次号へ続く



クリスマス会

↑ 東光園職員 川上さんのギター演奏



楽しい
ひと時でした！

12 月 19 日
アネックスでクリスマス会を開催しました。



ボランティアの皆様による日本舞踊



サンタさん
誰でしょう？

←ビンゴゲーム
当たったかな？ みなさま真剣です！



編集後記
皆様どんな
お正月をお迎
えになりました
か？ 昨年は
東日本大震災
と大変な年
でしたが、今
年は穏やかな
年であってほ
しいもので
す。



玄関に飾
る門松を
皆で
協力して
作って下さ
いました。